

昨年、授業に参加した小学校の子どもたちに、好きな生きものは何ですかと尋ねてみました。もっとも多かったのは、カブトムシやホタル、チョウなどの昆虫でした。小学校の理科だけでなく、国語などの教科書にも登場する機会も多く、また身近にいて形や色など親しみやすいというのも子どもたちが昆虫を好きになる一因なのかもしれません。

じつは地球上でもっとも種が多い生きものが昆虫です。私たち哺乳類が約4,000種と言われていますが、昆虫は発見されているものだけで約80万種とされ、生きものの半数以上を占めています。どうして昆虫がこれほどまでに繁栄しているのでしょうか。その謎を解こうとこれまでさまざまな人が昆虫の研究をしてきました。

今から70年ほど前、ドイツの動物学者がある発見をしました。ミツバチには言葉がある、というのです。当時は、人間を除く動物は感情のない機械のようなのだとする考えが主流でした。まして昆虫には相手に情報を伝えたりするようなコミュニケーションの技などあり得ないと思われていました。しかし詳しく観察してみると、ミツバチの働きバチが、蜜のある場所の方向と距離をダンス行動で仲間に伝えるということがわかったのです。この画期的な発見をしたカール・フォン・フリッシュは、のちにノーベル賞を受賞しました。

その後もミツバチの研究は進みます。たとえば、ミツバチは、数が多くなりすぎると新しい集団をつくり、群れが暮らすために最適な巣の候補をいくつか探します。そして十分な広さがあり天敵からも守られるような空間を巣として選びます。どの巣がいちばんいいか、を集団で決めるのですが、なぜ小さな脳しかないミツバチにこうした判断が、争いも起こさずにうまくできるのでしょうか。こうした謎に迫った人もいます。この研究によると、ミツバチたちは、まず最適な巣の候補をなるべく多く探し、その情報を仲間に伝え合い、どの巣がよいかという評価を繰り返しておこなうそうです。もっともよい巣を決めるには、仲間になるべく多く多くの情報を伝え、共有することこそが重要だというわけです。

シーリーという研究者は、ミツバチを、人間が平和に暮らしていくすべを教えてくれる神からの使者、と記しています。ミツバチのほかに、体の小さな昆虫が、私たち人間よりはるか昔に地球上に誕生し、いまなお繁栄しているのは、時間をかけて編み出してきたさまざまな知恵をうまく働かせているからでしょう。身近な小さな生きものたちは、私たちに不思議を知る喜びだけでなく、自然の一員としてうまく生きていくための手がかりをも与えてくれているように思うのです。



毎月第1日曜日は「家庭の日」
毎月第3日曜日は「青少年を育む日」です。
青少年育成都留市民会議編集委員

連載・青少年健全育成シリーズ 第272回

「小さな生きものたちの知恵に学ぶ」

青少年への声かけ・あいさつ運動の推進
『大人も子どももすすんであいさつをしよう』

広報「つる」広告募集！

あなたのお店の広告を広報つるに載せてみませんか？
広報「つる」は、都留市内の各家庭に配布されています
(10,500部発行)ので、多くの方の目に触れます！

問合先：行政管理課 秘書広報担当

広告料金

掲載場所	印刷色	金額 / 枠	備考
裏面	カラー	20,570(予定)	2カ月掲載
内面	2色刷り	10,280(予定)	2カ月掲載

掲載月は、①1・2月②3・4月③5・6月④7・8月
⑤9・10月⑥11・12月の6パターンとなります。
掲載状況につきましては、下記をご参考としてください。
また、詳細につきましては、ぜひお問い合わせください。

広告掲載欄

広告掲載欄